

---

# あれは、恋ではなかった

コウコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あれは、恋ではなかった

### 【Nコード】

N8969H

### 【作者名】

コウコ

### 【あらすじ】

17歳になる前日に彼女は死んだ。「17歳になったら恋をする」  
そう彼女が言ったから。だから、あれは恋ではなかった。

## 第一話

「ねえ、ソラ。今日の零時を過ぎたら、私十七になれる」

そう言って笑った彼女の声は、掠れていたはずなのに、俺にはとても澄んで聞こえた。

「生きて十七歳を迎えられたら恋をしようと思うの。もちろん、ソラとだよ？」

点滴の管に繋がれ、酸素マスクに顔を覆われた笑顔は、それでも壮絶に美しかった。

だからこそ、いま彼女に聞きたい。

ヒカル、お前はあの時どちらの未来が待っていることを予想した？

自分の事に関してはひどく現実的だったお前が、最期にああ言ったのはなぜなのだろう。

だからこそ、いまお前に聞きたい。

お前、恋したかったのか。

彼女は16歳の最後の日に死んだ。七月六日のことだった。

だから、あれは、恋ではなかった。

一、

まだ少し肌寒い風が吹く、四月の空。屋上からは庭の桜が一望できる。でも真夜中の今、桜は微かにピンクの色を俺の視界に揺らすだけで、その様子を俺は楽しめないでいた。

手には包帯。その原因を思い出して吐き気がした。この春休み、俺は大事なものをひとつ、失ったばかりだ。

「だれ？」

柵に手を掛けてぼーっとしていた俺の後ろから、柔らかいアルトの音が響く。

不思議な声だった。大人の声にも子供の声にも聞こえる。

振り返った俺の目に入ったのは一人の少女。

真っ白い肌に黒い髪。細い体。何より印象的だったのが、そのオーラだった。どこか儂げで、寂しげで、でも目だけが強い力を放っていた。

「ねえ、だれ？ その腕、入院してるんでしょ？」

答えない俺に、彼女は質問をし続ける。

「年はいくつ？ 何号室？ ねえ、答えて？」

不躰な俺の視線にやっと気づいたのか、彼女は続けてこう言った。

「人のことじろじろ見るくらいなら、質問にくらい答えてよね」

そう言って膨らました頬は、彼女を幼く見せた。

「えっと、ごめん。なに？」

「もう！ 年齢！ いくつ？」

そのときようやく彼女が俺の年を聞いていることに気づいた。それと同時に、彼女の言葉が耳に入らないほどに、彼女に見惚れていたことにも。

「滝嶋空くんって言うんだ。じゃあソラだね！ 病室もね、近いよ。私ちようど真上だから！」

俺が、怒った彼女の言葉によろやく目を覚ましてから、お互いに自己紹介し合った。屋上に置かれたベンチに隣り合って座る。

白い部屋着にカーディガンを羽織った彼女の名前は、ヒカル。

年は俺の一つ下で、そしてさらに偶然なことに、彼女は俺の病室の真上、403号室の患者だった。

「私この病院詳しいよ？ もう入院生活長いから。三階は確か、怪我の人だもんね。じゃあその腕だけでしょ？」

その言葉に俺は胸の痛みを感じた。確かに俺の怪我はこの腕だけ

だ。ただし、見えない傷もこの世には存在する。

俺はこの総合病院で、精神科にもかかっていた。でもそれを見ず知らずの女の子に言うつもりはまったく無かった。もしそれを言えば、事情を話さなければならなくなる。まだ心に思うだけでも苦しい。

「ああ、そうだよ。腕折っちゃって。しかも複雑骨折の全治三ヶ月」「そっかー。じゃあ入院はせいぜい一ヶ月ってところでしょ。いいなあ。すぐに外に出られるね」

足をブラブラさせながら、彼女は笑顔を絶やさない。だから俺は軽い気持ちで聞いてしまった。入院生活が長いからと、彼女は言っていたのに。

「ヒカルは？ 見たところ怪我は無いみたいだから病気か？」

俺は本当に無神経だったと思う。他人の心の機微に疎くなっていたとしか思えない。

ついさっき思ったばかりだったのに。見えない傷も、この世には存在するのだと。それは心の傷だけじゃない。そんなこと、ここが病院である以上、考えなければならなかったのに。

「そうだよ」

冷たくも感じたその一言。でもヒカルは笑顔だった。

夜中に病室を抜け出すのは、これが初めてではない。

屋上に続く扉は古く、ちよつとしたコツで開くことを教えてくれたのはヒカルだ。

屋上で初めて会ってから一週間がたった。それから半ば強制的に夜の散歩に付き合わされている。散歩と言っても病院の屋上のベンチで、ただ2人で話をする。

「おそいよ、ソラ」

そう言って、頬を膨らませこちらを向く。今思えば、このヒカルの癖は最後まで変わらなかつた。いつあっても、その後決まって彼

女はこう言う。

「今日はどんな話を聞かせてくれる？」

彼女の目はいつもキラキラしていた。

それは星に似ていた。山で見る、静かで、そして凜と瞬く星に。

俺にとつて星は憧れと夢の象徴で、山は畏怖の対象だ。

だから俺はヒカルは、もっと見ていたいとも思うし、目を背けてしまいたくもなる。

今はもう、それすらも叶わないが。

初めてヒカルと会った日に、彼女は病気で長く入院しているといつた。

「お母さんはお仕事をして忙しいの。だからあんまりお見舞いに来てくれなくて、退屈なの。ソラはひまでしょ？」

彼女の入院費のために母親は働いている。見舞いにこれないのは仕方ないのだと笑って言った。

一瞬で囚われた。強い瞳と、いつでも笑う強さに。人として、憧れた。

「今はソラがいるから良いけど、退院したらまた一人だなあ」

言葉だけ聞けば寂しそうなのに、彼女は寂しさすら受け入れて笑う。

「1ヶ月で退院なんていわないで、あと3ヶ月いてよ」

「なんで3ヶ月なんだよ？」

甘えたように言うヒカルに、まるで友達のように言葉を返す。

さつき会ったばかりなのに、もう何年も連れ添った友人のようにも感じた。

星を見続けてきたからだろうか。ヒカルが星のようで、だからこんなにも気安く話せてしまうのか。

「だって3ヶ月経ったら私死んじゃうもん。その間くらい、誰かとお話したいと思うのは普通でしょ？」

俺は息を呑んだ。言葉が出なかった。

そんなことを笑って言うヒカルは、どこか壊れていると思った。

ああ 同情だ。今、心に沸き起こった感情は、醜いものだ。

自分は不幸だと思っていた。大事なものを失って、怪我をして、そんなときに会った彼女が、自分より「下」だと一瞬でも感じた自分に吐き気がした。

「あ、そうゆう顔嫌い」

黙ってヒカルを見つめる俺に、ヒカルはきりつとした強い目を向けて言った。

「私のこと『不幸』にしないで。ソラの価値観押し付けしないで」

「……っ、ごめん」

反射的に謝った俺に、今度はヒカルが笑って言う。

「じゃあ、ソラのこと教えて？ 死ぬのは怖くないけど、シラナイのは悔しいの」

だから俺は毎夜こうして屋上に来る。ヒカルの「シラナイ」を減らすために。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8969h/>

---

あれは、恋ではなかった

2010年10月9日15時52分発行